

萌芽による群落再生

石 沢 進

株元からの萌芽

ユキツバキは、樹林下面に広がり群落を構成しているところがある。その場合、ユキツバキは低木状であり、幹は斜上している。幹は積雪の重みで地表近くに圧せられ、消雪後ある程度までは回復するものの、毎年繰返されるので、何年後には斜上する形態になる。結果として長年の間に伏臥状の樹形をとることで、毎年積雪の下敷きになりやすく、枝葉が保護されることになるので、むしろ生き続けることになる。

斜上している幹が先に長くのびるとやがて平伏状になり、ユキツバキの幹は地面に接するようになる。次第に地面に埋る。長い間には途中から根が生え、独立の個体になる。斜上する幹の根もと部分には、新芽が出来、それが生長して新たに垂直に伸びる若い幹が形成される。つまり、幹が伏すことにより、株の中心部にすきまができるが、新たに株元から萌芽して、すきまを覆うことになり、樹林下面広がる群落となる

切株からの萌芽

新潟県の山間部では、昔シバ刈りを行っていた。2～3メートルの低木を切り倒して束ねて乾燥させ（ボヤと呼ぶ）、燃料に使ったり、また、つる性のマメ、ナガイモなど野菜を育てる支柱に使用していた。ユキツバキを切り倒すと、葉が着いたまま乾燥し、それを燃料にすると、燃える時、音をたてて跳ね、火の粉を散らすので、燃料に適さないと嫌われていた。また、支柱にしても葉が着いたまま不都合であり、殆ど使っていない。ユキツバキは役に立たない、厄介ものとして扱われていたようである。シバを刈るときは、ユキツバキを刈らずに残しおくと繁茂してしまうので、全部切倒してしまう。それでも切株から新たに芽が形成され、伸長すると再び繁茂する。切はられた樹林下で他の植物に先んじて切株から萌芽して群落の下層に優占し、その再生力はかなり強いようである。



写真1 樹林下に広がるユキツバキの群落
赤 崎 山 1994 5 22



写真2 切株からの萌芽
赤 崎 山 1994 5 22



写真3 切株からの萌芽（先端部分拡大）
赤 崎 山 1994 5 22